



地域福祉の推進

市長が行く vol.3

令和5年(2023年)5月1日



秦野市社会福祉協議会 ふじむらかずよし 藤村和静 会長

高橋昌和 市長

秦野市民生委員児童委員協議会 たむらしょういち 田村正一 会長

「市長が行く」は、市長が医療・産業・教育など多岐にわたるテーマに沿った現場を訪問し、対談方式で意見を聴き、市政への反映や本市の魅力向上を目指す企画です。

3年に及ぶ新型コロナウイルスの影響により、地域活動やイベント開催の自粛が続き、対面での活動が減少したことで、地域における人とのつながりの大切さを再認識することとなりました。

そのような中、本市の地域福祉の推進について、秦野市民生委員児童委員協議会の田村正一会長と秦野市社会福祉協議会(以下「社協」という)の藤村和静会長に、高橋昌和市長が話を聴きました。

「コロナ禍の対応」

高橋 3月にマスクの着用が個人の判断に委ねられ、5月8日からは、新型感染症の感染症法上の扱いが2類相当から季節性のインフルエンザと同様の5類

になります。「コロナ禍での活動はご苦労があったのではないのでしょうか。」

田村 「コロナ禍で対面の活動が非常に難しくなり、福祉関係のイベントが軒並み中止になりました。また、民生委員の大きな役割の一つである高齢者見守りのためのお宅訪問は感染防止に配慮して、短時間の訪問に努めてきました。できる限り顔を見てお話をすることを心掛けていますが、希望されない方には、電話での安全確認やお手紙をポストイングしました。」

藤村 社協でも地域活動ができない状況が続きましたね。今後、どうしようか考えていたときに、ボランティアの方から「在宅でマスクづくりをやりたい」との声をいただきました。そこで、地域で働く人々を応援しようとして「コロナに負けるな!!地域応援プロジェクト!!」を企画し、約150人の協力によりマスクを約2000枚作りました。

田村 あの頃は、全国的にマスク不足が続きましたね。

高橋 福祉の現場では、ちょうど、利用者の生活と命を守るため、マスクの確保が課題でした。**藤村** 応援メッセージを添えて福祉施設へ配付したところ、大変喜ばれました。特に、保育所では、子供用のサイズを作りお届けしたら喜ばれましたね。**高橋** 本当にさまざまな形で、多くの市民からご協力をいただきました。感謝しています。

民生委員の役割

民生委員一斉改選が過ぎて

民生委員
の
みんぴょん



高橋 昨年12月、3年に一度の民生委員の一斉改選がありました。民生委員は身近な困り事や相談先が分からない方の「相談役」、行政や専門機関への「つなぎ役」をしていたり大切なパートナーです。民生委員をやったよかったことや日頃の活動で大切にされていることなどお聞かせください。

田村 特に、1人暮らしの高齢

者は、コロナ禍で外出機会が減りましたから、会って話すと、とても喜んでくれます。「いつも「苦労さま」、「ありがとう」といった言葉をいただくと、私たちの活動が高齢者の支えになっていると実感しますね。民生委員をやったよかったですし、やりがいを感じます。



高橋 そういった地域の方からの言葉が、民生委員の活動の支えにもなっているのですね。

田村 普段から、話を聞くことを大事にしています。会って、話をし、聞くことで信頼関係ができ、いろいろと相談しやすくなると思っています。

高橋 日頃のあいさつや声掛け、コミュニケーションは大切に、

民生委員が地域で果たす役割は大きいです。本市の民生委員の定員は260名で、3月現在、充足率は95%。まだ、民生委員が決まっていない地域もあります。

田村 民生委員は地域から選出されますが、地域住民を十分に把握できないと、民生委員の推薦が大変苦労します。民生委員が欠員になってしまったときは、見守られる高齢者などに不安を与えないように、隣の地域の民生委員が代わりに見守り活動を行っています。

高橋 広い地域をカバーするのも大変ですよ。それぞれの地域から選出されるよう、市も一緒に取り組んでいきたいと考えています。

藤村 民生委員制度が始まって100年以上経ちます。地域の状況は、今と随分違いますね。5年前は、固定電話の普及率が3割くらい。当時の民生委員の家には固定電話があり、大半が玄関先に置いていました。「電話を貸してください」など

と貸し借りがあり、地域のコミュニケーションツールになっていましたね。当時のつながりが一番温かかったと思います。今は、固定電話は、家の奥、居間の方に置く家が増えました。固定電話の普及率が上がるにつれ、地域のつながり、人とのかわりが薄くなってきたと感じます。民生委員が対応しにくいことや報告書の作成など、負担もあるのではないですか。

田村 以前と比べると、民生委員の負担は大きく軽減されています。高齢者からの相談は地域高齢者支援センターにつなぎ、子育て支援や行政の福祉活動も充実するなど、つなぎ先が増えました。民生委員が困り事を解決しなければいけないということはないですね。民生委員は、つなぎ役なので、相談先をしっかり把握し、しっかりと案内できるように努めています。

高橋 地域の福祉で求められることも非常に多岐にわたっていますよ。

藤村 民生委員がつなぐといっ

ても、利用できる福祉サービスを
探すのも大変です。しかし、
本市では、地域高齢者支援セン
ターや地域共生支援センターに

相談すれば、必要に応じて高齢
者、障害者、児童の分野の福祉
サービスにもつながるネットワ
ークがあります。これは、民生
委員の活動にとつて、ありがた
いことですよ。これからは、
福祉サービスでは対応が難しい、
ごみ出しや買い物支援など地
域の身近な困り事への対応に苦
慮するのではないでしょう。



田村 ごみ出しも収集場所まで
出すことが困難な高齢者や障
害者などの世帯には、家の前ま
で取りに行く「ほほえみ収集」の
サービスができ、利用につなげ

ています。どんな困り事もしつ
かり相談先へつなげるよう努め
ています。

地域福祉を支える人を

増やすために

高橋 民生委員には、本当に、地
域のさまざま課題をきめ細
やかに拾い上げていただいてい
ますね。定年延長の影響で、地
域で活動する時間が減り、地域
での活動が難しい状況にありま
す。地域活動に参加してくれる
人を増やすためにはどうした
らいいでしょうか。

田村 今はボランティアが減り、
高齢化しています。若い人も
う少し参加してくれるといいで
すね。地域によっては、若い人
が参加していますが、例えば、
ボランティアで福祉委員という
名前で民生委員をサポートし、
その次は民生委員になっていた
だければいいと思っています。
若い人たちも、今は、共働きで
ボランティアをする余裕があり
ません。難しい課題ですが、と

ても重要です。

高橋 高齢化が本格化する中、
地域の中で地域課題を解決して
いく、「共助」が今後ますます重
要になると考えています。

藤村 社協では、地域ボランテ
ィアを増やすため、新型感染症
の流行が始まった頃に、皆さん
に福祉をもっと身近に感じても
らい、もっと気軽に参加しても
おうと「一日一福キャンペーン」
を始めました。まずは、1日1
つから、「自分の考える福祉に
取り組んでもらおうと始め、今
年で3年目になります。小さい
お子さんからもたくさんのご
応募がありましたね。

田村 とてもいいですね。草の
根で広がってほしいです。

藤村 「あいさつ、これが福祉で
すか」という意見をいただきま
すが、それでいいんです。「あり
がとう」、「おはようございま
す」、まずはあいさつから始め
ましょう。小さいお子さんにも
関心を寄せていただき、続けて
いきたいですね。また、今まで
ボランティア講習会は年1回数

日、複数回の参加としていまし
たが、ボランティアの裾野を広
げようと、令和5年度からは1
回からでも参加できるように
見直します。

田村 気軽にボランティアに参
加できるのはいいですね。

藤村 若いときからボランティ
アに興味を持ってもらい、一時
期、社会人として忙しくても、
その後、地域に戻り活動できる
ようなつながりをつくっていき
たいです。



高橋 先日、保健福祉センター
で、毎月第2、第4土曜日に活
動する、おもちゃ図書館「ぱき
らっこ」の活動を見学しました。
障害のあるなしにかかわらず、
子供たちが、おもちゃで一緒に

遊ぶ、交流の場になっていきます。ここで、小さいときから参加していた子が高校生になり、今はボランティアとして参加しているそうです。子供のときのボランティア活動の参加、経験が、大きくなってつながっていくのですね。大事なことです。

「地域共生社会の実現に向けて」

高橋 平成28年の津久井やまゆり園の事件をきっかけに、県では「共に生きる」の憲章を作り、取り組んでいます。本市でも、共に支え合うことで安心して、心豊かに暮らせる社会を目指しており、社協、民生委員、市が連携して「地域共生社会」を目指すことは大事だと考えています。
田村 そのためには、自治会の活性化が重要ですね。地域により異なりますが、加入率をどう上げていくのか。防災面でも大事なことです。

高橋 人のつながりがある地域は、自助、共助がありますね。いざというときに、非常に役に立

つと思います。

田村 自治会や隣近所との付き合いは共助の柱ですよ。現在の私の地域では、市の防災課と一緒に避難行動要支援者の個別避難計画の作成に取り組んでいます。災害時、家族がいなければ、隣近所の力を借りるしかありません。

藤村 昔は、みそ、しょうゆがなければ隣近所に借りに行っていました。今は、24時間営業のコンビニがあるから、その機会がなくなりましたね。災害時に、本当に助け合えるかは、日頃のあいさつにかかっています。まずは、あいさつ、「一日一福」です。
田村 日頃のあいさつ、付き合いが重要ですよ。

「地域福祉の推進」への期待



高橋 鶴巻地区では、随分前から、電球を替えるのが難しいと

いった高齢者のちょっとした困り事の手助けをする取り組みがあります。

田村 地区社協と民生委員などが密に連携し活動しています。

高橋 地域の助け合いの取り組みを若い人たちが見て、子育てサロン「ちっちゃなて」ができて、相談なども行っていて、未就園児がいる家庭の交流の場となっています。

藤村 コロナ禍で、市主催でフードパントリーを始めましたね。私は、社協の職員にいつも伝えられていることがあるんです。「目的と手段を間違えないように」。行政の目的は、困っている人に食料を配ること、社協は地域のリーダーを見つけ、育てること。行政と社協では目的が違ふこと。色々な地域活動に地域の方の参加を求め、リーダーを見い出し、活動してもらおう、それが、本来の社協の仕事だと思っています。
高橋 地域のために、それぞれが連携して活動できる、これが本当の地域福祉ですね。

藤村 社協では、市民から寄付

されたものを月に1回、お渡しし、フードパントリーとして配布してくれる地区があります。もっと地域活動が広がっていくといいですね。

高橋 今後とも協力をお願いします。誰もが共に支え合って、暮らせる「地域共生社会の実現」に向けて、常に顔の見える形で共に手を携えて地域福祉を推進していきたいと思っています。

